「ＯＥＣＤ東北スクールに参加して～エンパワーメントとしての復興教育～」

井口　成明
（東京大学教育学部附属中等教育学校　体育科）

1）東日本大震災からの時間経過が生む意識格差

東日本大震災発生から３年の月日が経過した。東北地方の復興活動は思うようには進まず、仮設住宅での生活を強いられている方々も少なくない。また、福島県にある東京電力第一原子力発電所の水素爆発は、未だ解決されず地元の農業、漁業、産業関係者を苦しめている。しかし、このような状況下にあっても被害地域から200ｋｍほど離れた東京をはじめとする地域では、左記の災害も過去のものとなりつつある。東京でも実施されていた節電のための計画停電も数カ月でなくなり、商品、ガソリンをはじめとするエネルギー供給もすぐに安定を取り戻した。何の制限も強いられることのない生活の中で、東北地方、特に被災状況の大きかった福島、宮城、岩手の三県復興活動についての認識も希薄になりつつある。この災害を東北地域のものだけでなく、日本の災害として、中学、高校生に認識させていくことは重要な課題であると考えた。

2)「ＯＥＣＤ東北スクール」の誕生とその構成

2011年４月、OECD（経済協力開発機構、本部パリ）の事務総長が来日し、３月11日の震災に対する東北の復興に協力することを約束した。そして、文部科学省、福島大学と協議を重ね、復興教育プロジェクト「OECD東北スクール」（文部科学省復興教育支援委託事業）が生まれた。OECD東北スクールは、福島、宮城、岩手の被災地から中学生･高校生約100人を集め､2年半にわたる集中スクールと地域スクールを経て、「2014年８月、パリで東北の魅力を世界にアピールするイベントをつくる」という、プロジェクト学習をその内容としている。東北スクールの開講期間は、2012年３月―2014年10月となっている。これは復興が長期に渡るため、一回完結型の支援イベントでなく、長期フレームワークを設定した。これは、創造的な復興に必要な力は、持久力、人間関係調整力、発想力、企画力、実行力、建設的批判力、自主性・自立性、国際性など、「プロセスから学ぶ力」が主なためである。

現在、福島・宮城・岩手から約100人の中高生が、約20人の引率者（教員、教育委員会、NGO）と協力しながら、ミッションを遂行している。その東北の代表生徒と共に関東から東大附属と、関西から奈良女子大学附属の生徒がエンパワーメントとして第１回目のスクールから参加している。

ここでは単に震災後の東北の状況や復興の手段や国の取り組みを学ぶだけでなく、また教師や専門家から復興に不必要な力や発想の指導を受け活動していくだけでもない。生徒も教師も大きな課題を解決することを目標にした授業が展開されている。東北スクールでの共通目標は、「パリでの復幸祭というイベントを開催し、成功させること」となっている。これは、パリのシャン・ド・マルス公園を中心に東北の復興と魅力を世界の人々にアピールするイベントである。このイベントの実施のため全５回(１回が３泊４日～５泊６日)にわたる集中スクールと２回のリハーサル合宿で企画、実践し、不足の部分はインターネットを利用してのスカイプ会議やメールでの意見交換で補い、各地域でそれぞれの活動をし

てきている。また、100人の参加生徒が4つの取り組みテーマ(シナリオ班、コミュニケーション班、産官学連携(資金調達)班、セルフドキュメンタリー班)を選択し、それぞれの使命と課題を解決し活動してきた。

以上概略を述べたが、次にはＯＥＣＤ東北スクールが具体的にどのように開催されているか紹介することとする。

3) 参加メンバーとその役割

- 集中スクール……5回の集中ワークショップ（約1週間）を開催し、多彩な講師による体験活動や熟議をおこなった。参加者全員の全体会となり、参加者は、各地域や学校ごとにチームとして参加し、引率者も主要なメンバーとなっている。
- 地域スクール……地域ごとに各地の状況に応じて、若者からの地域復興を企画・実行する地域スクールをおこなった。週末の活動や総合学習の一環として、また放課後の活動として月2回程度おこなわれた。
- テーマ別活動……パリでのイベントを成功させるために「シナリオ担当」「産官学連携担当」「コミュニケーション・PR担当」「セルフドキュメンタリー担当」の各活動をおこなっている。地域をまたいでダイナミックに展開する。
- 2014年イベント……東北の復興を世界にアピールするプロジェクトの最終ゴールである。自分たちで内容を企画し、実施するための資金を調達したり、そのための広報活動を行ったり、自分たちの活動を記録したりと、様々な人々と協力しながら、ゴールをめざす。

① 課題別グループ（班）

シナリオ／ＰＲ班

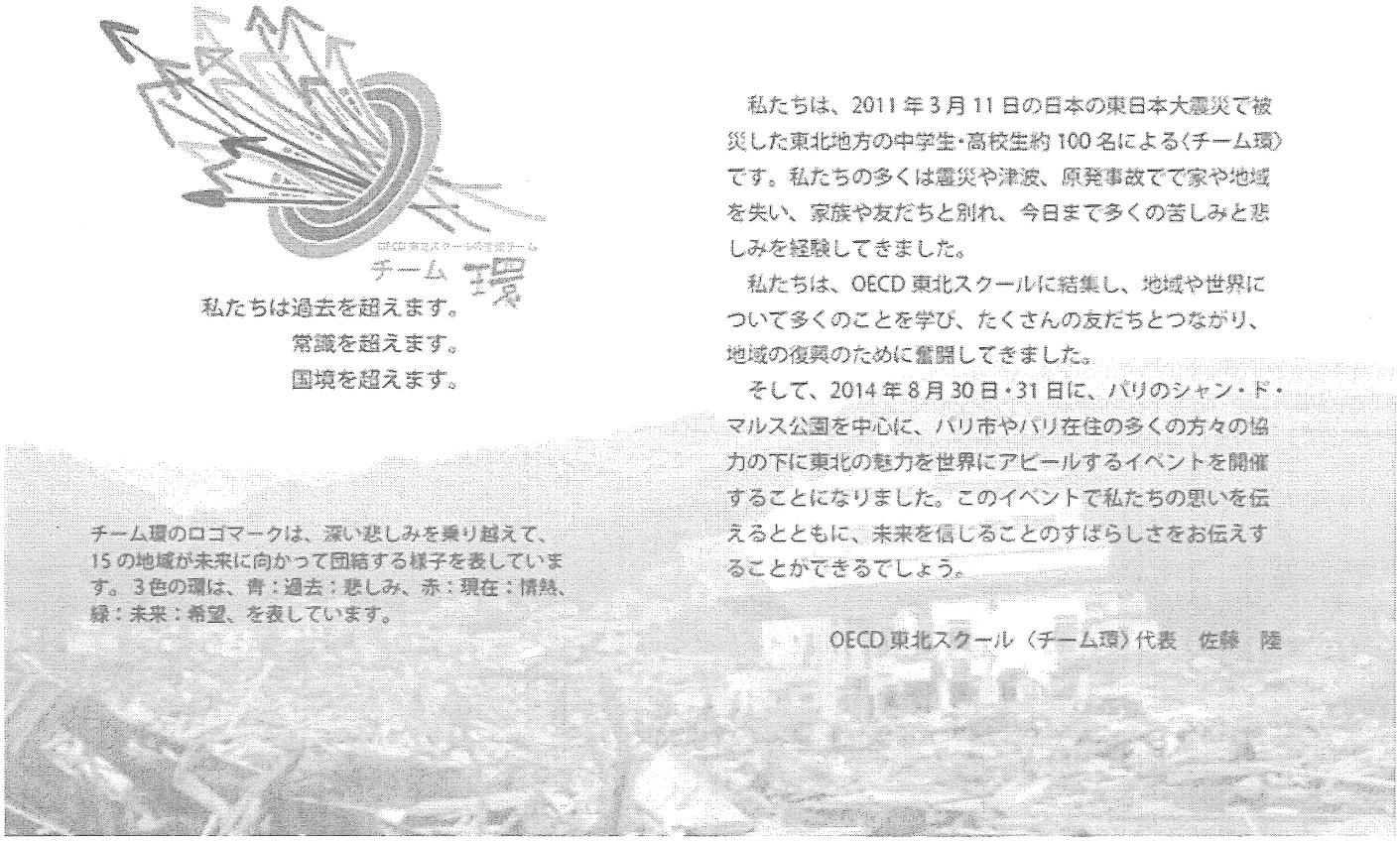
2014年8月にパリで行われる「東北復幸祭」の内容とパリでのイベント全般を企画、実践と各グループの集約をおこなっている。

産官学連携（資金調達）班

パリでの「復幸祭」に必要な資金(渡航費、滞在費、活動費、物品借用費等)を調達することを目的にしている。日本の企業へ資金寄付の依頼状を送り、オファーのとれた企業へプレゼンテーションを行いに行き、資金・物品(オリジナルTシャツ等)の寄付を募った。2014年3月時点で、寄付金は5000万円以上集まった。

コミュニケーション・ＰＲ班

参加生徒のコミュニケーション環境を整備したり、一般の方へのPRのためのホームページやポスターの作成などをおこなっている。エンパワーメント校以外の東北の生徒と教師全員が、スポンサーでもあるソフトバンクからiPadを借用し、日々の連絡方法などを決めて徹底させた。また、外部へのＰＲのために下記のようなポスターを作成した。



セルフドキュメンタリー班

震災から現在までの各地域での活動や人々の様子を、1本の映画にして発表する予定をしている。2014年3月現在でも収録が続いている。

② 地域スクール参加メンバー

前述したが東北スクールは、被害が最も大きかった３県（福島、宮城、岩手）中学・高校生とその学校の教員、さらに東京、奈良のエンパワーメントパートナー２校の合計11チームで構成されている。それぞれの地域の生徒達がどのような思いでこのスクールに参加しているか紹介する。

（以下の紹介文は、2013年3月の第3回集中スクールの報告書からのもの）

・いわき生徒会サミットチーム（福島）

チームが30名あまりと、もっとも規模が大きいことから、OECD東北スクールプロジェクトのエンジンとして活躍しています。全体リーダーを始め、4つのテーマ別担当リーダーもすべていわきチームから出ています。地元いわき市の津波被害や風評被害からの復興を話し合っています。

・伊達市合同チーム（福島）

原発事故による風評被害により、特産の果物がほとんど売れなくなってしまいました。私たちは大人たちに元気を与えようと、農協と協働して地元の果物を使ったゼリーの開発を進めようと考えました。するとこのアイディアが実現し、ゼリーが商品化されることになりました。パリの有名シェフにも試食してもらい、「とてもおいしい！」という感想をいただきました。

・大熊町チーム（福島）

中学3年生（2013年）ばかりのチームです。私たちは原発事故によって地域を失い、内陸部の会津若松市に避難しています。地域がないために、セルフドキュメンタリーの映像の記録や編集をしたり、企業への協力のお願いレターを出したりしています。会津出身の新島八重をテーマにした短編映画を企画中です。

・相馬市チーム（福島）

放送・演劇部が参加しています。震災後、津波被害と原発事故の被害とで悩む苦しむ高校生の姿を脚本化し、演劇を上演して多くの賛同の声をいただいてきました。相馬は震災直後、地元に伝わる「相馬野馬追い」が復活し、大きな希望を得ました。パリでその騎馬武者行列を行うのが夢です。

・安達高校チーム（福島）

自然科学部のメンバーです。福島県の中通りは事故を起こした原子力発電所から離れていますが、放射能の汚染があちこちに見られ、風評被害が深刻です。私たちは、この放射能を科学的に調査し、風評被害をはねのけるのが東北スクールでの目的です。コミュニケーションチームとしてロゴのデザインやホームページも担当しています。

・女川チーム（宮城）

津波被害が大きかった沿岸部から参加しています。NPOの方と協力しながらがれきでアートとして表現したり、廃油でつくったキャンドルを、地元商店街を活性化させるイベントに活用したりしてきました。今も続いている被災地での復興のがんばりを感じてもらいたいです。

・南三陸・戸倉チーム（宮城）

津波の被害で街が壊滅し、特産の牡蠣も壊滅的な被害を受けてしまいました。私たちは地元の漁業協同組合と協力し、牡蠣小屋を復活させ、地元を復興させようと活動してきました。これからパリや国内の方と協力し、私たちの地域の牡蠣を全国で食べてもらうことが目標です。

・気仙沼チーム（宮城）

第３回集中スクールの開催を機に、メンバーの数が倍に増えました。私たちの地域はウニやフカヒレなど、漁業で賑わっていた町なので、その「気仙沼のめぐみ」を発信していきます。また、気仙沼復興の象徴である天旗（凧のこと）をパリの青空の下に揚げるのが夢です。

・大槌チーム（岩手）

私たちの地域も津波で、何もかも流されてしまいました。地元では高校生が中心になって大槌に長く伝わってきた伝統芸の保存活動を行っています。私たち中学生は、大槌の「過去・現在・未来」を伝える写真展を企画しています。

・東大附属チーム（エンパワーメント東京）

エンパワーメントパートナー（応援団）として、第１回集中スクールから参加しています。被災地の外側の人間として何ができるのか、活動に携わりながら考え続けています。

・奈良女子大付属チーム（エンパワーメント奈良）
私たちもエンパワーメントパートナーとして参加しながら、いろいろなことを学んでいます。すでに大学に進学しているメンバーもいるので、事務局のお手伝いなども行っています。

4）活動内容　（3年間の活動計画）

年	月	日	全体の動き	場所
2011	3	24	OECD東京センター・OECD教育局により諸外国の教育緊急対応発表	東京センターウェブサイト
	4		OECD事務総長アンヘル・グリア来日。首相・関連大臣に復興支援表明	日本政府関係省庁
	4～8		OECD教育局、ヒヤリング調査・文献調査などを基に、「ＯＥＣＤ東北スクール」フレームワーク設計。	パリ
	8		東日本大震災復興支援財団に第一期助成支援申請。	東京
	11		2011年11月 OECD教育局長バーバラ・イッシンガー、文部科学大臣と面談。教育復興支援の継続を表明	文部科学省
		26	OECD教育局、福島大学と懇談。	福島大学
2012	2		“Strong Performer Successful Reformer”ビデオシリーズで、日本の震災教育復興事例を世界に紹介	パリ
			東日本大震災復興支援財団に第二期助成支援申請。	東京
	3	2	第１回アドバイザリーボード会議（OECDバーバラ教育局長参加）	花巻市
		26-30	第１回ＯＥＣＤ東北スクール（いわき）　ミッション・プロジェクトゴールの提起、グループの組織化、批判的思考力、目的の共有化、初発のアイディアのプレゼンテーション、コンテスト	いわき市
	4		運営事務局稼働	
	8	7/31～8/4	第２回ＯＥＣＤ東北スクール（いわき）　ポートフォリオの教材化、ローカルチームごとの取り組みの報告・批評、シナリオ・資金調達・コミュニケーション、セルフドキュメンタリー担当の機能化、アイディアの絞り込み（未完了）	いわき
	9	13	文科省と打ち合わせ	東京
		14-17	三浦、パリ訪問、パリ市当局、商工会議所、ＯＥＣＤ、在仏日本人会等、協力依頼	パリ
		29	ローカルリーダー会議（福島）（全体スケジュール確認、イベントのアウトラインを確認、各担当の予定を共有。）	福島市
	10	9	NHK BS「Tomorrow beyond 3.11」でＯＥＣＤ東北スクールを放映 文科省等打ち合わせ	東京
		17	気仙沼市を訪問、スプリングスクール開催で交渉→決定	気仙沼市
		21	ローカルリーダー・メンター合同会議（全体スケジュール確認、イベントのアウトラインを確認、各担当の予定を共有、資金調達の研究）	仙台市
	11	16	第１回ハイレベル円卓会議	文科省

		19	OECD 日本政府代表部吉川大使来日、福島、いわき訪問	福島市、いわき市
		24	生徒・ローカルリーダー会議（スケジュール、イベントの方向性の確認、プレゼンの打ち合わせ）	福島市
	12	25	Cheer! NIPPON 参加、東京でローカルリーダー・メンター合同会議（進度の共有）	東京
		26	ユニクロでプレゼンテーション、資金調達稼働	東京
		31	ユニクロ Clothes for Smiles へ応募。739 企画中 4 位。	
2013	1	26	生徒・ローカルリーダー会議（スケジュール、イベントの合意の確認）→雪のため LL 会議に	福島市
	2	4	アンドレアス・シュライヒャーOECD 教育局次長講演（伊達、大熊と交流）	福島大学
		16	生徒・ローカルリーダー会議（スケジュール、イベントの合意の確認）	福島市
	3	2	復興教育シンポジウム（福島）でＯＥＣＤ東北スクールを報告	福島市
		3～8	事務局、パリ訪問。OECD 日本政府代表部にて説明会。パリ市当局と交渉。	パリ
		9～10	セルフドキュメンタリーチーム、被災地取材活動	いわき、会津若松
		11	３．１１リヨンイベントにパネルおよび映像で参加	
		28	復興教育並びにＯＥＣＤ東北スクール報告書の完成	
		26～29	第３回東北スクール（気仙沼）（このときまでに、イベントのアウトラインを決定し、生徒との間で共有。イベントの具体的内容の分担、着手。大人と協働した内容づくり。各担当の状況の共有。アピールする内容の共有。） 第２回アドバイザリーボード会議、第１回参加自治体関係者会議	気仙沼市
		30	下村文科大臣と懇談	気仙沼市
	4	上	イノバティブ・ラーニング・ラボラトリ（以下 ILLab）準備室の設置	
		上	国内向けホームページ、パンフレットの作成　パリ向けのパンフット、カードの作成 運営事務局の増強（２名のフルタイム雇用）	
		19	渡仏生徒の事前説明会、渡仏生徒の事前指導（Skype も含む）	いわき市
		25	第２回ハイレベル円卓会議	
	5	1～6	生徒リーダーの渡仏. OECD 本部にて、OECD 東北スクール関係者の集い、記者会見、レセプション開催。	パリ
	6	15-16	LL、生徒リーダー会議（渡仏の総括、第４回スクールまでの課題確認、情報共有、ICT 野活用状況）	福島市
	7	20	LL 会議（第４回スクールの内容の共有、準備）	仙台市
	8	4～7	第４回東北スクール（東京）（イベント内容の詳細決定。練習・リハーサル計画、ステージデザイン・音楽・美術・スピーチ・ダンス・映像・コスチューム等の絞り込み、国内外へのアピール、企業へのアピール） 第３回アドバイザリーボード会議、第２回参加自治体関係者会議	東京
		?	国内外のイベント会社との契約（国内においては準備物の作成、国外においては大型機材やステージ等の借用など）	

	9	14	LL、生徒リーダー会議	仙台市
	12	22-26	スタッフ渡仏、パリ現地調査、事務会議	パリ
	10	19	LL、生徒リーダー会議	
	11	23	LL、生徒リーダー会議	
		下	資金調達の終了、イベント・渡航規模の最終確定	
	12	25-27	生徒リハーサル合宿（国立磐梯青少年交流の家）	福島県内を予定
2014	1	下	報告書作成	
	2	8	LL、生徒リーダー会議	
		22	第２回復興教育シンポジウム（福島）でイベント内容を紹介	
	3	22-25	第５回ＯＥＣＤ東北スクール（岩手県）（全体の動きの確認、リハーサル、イベント内容の修正、東京プレイベントの準備、渡航準備）	岩手県
	4	上	ILLab 設置 運営事務局体制の社団法人化への移行検討	
	5	1～6	事務打ち合わせのためと仏	パリ
	7	?	パリ・JAPAN エキスポ、ブース出店	パリ
		20	スタッフ事前準備のために渡仏	
		25	生徒２泊３日程度のリハーサル、地元で	
	8	10	東京でプレイベント	東京
		23	先導スタッフ渡仏	
		26	生徒、引率、スタッフ、渡仏	
		30-31	パリシャン・ド・マルス公園を中心にイベント開催	パリ
	9	2	OECD 本部に桜の植樹	パリ
	12	下	東北で報告会	
2015	1	下	生徒集会	
	2	下	報告書作成	
	3	上	第３回復興教育シンポジウム（福島）パリでのイベントおよびＩＬＬab の研究結果について報告。	

上記の表では、2013年3月の集中スクールの報告書に掲示された予定表である。多少の変更はあるが、ほぼ予定通り実践してきている。2013年8月に行われた第4回集中スクールでは、それぞれの地域がパリでの具体的な活動内容と計画を発表し、問題点、課題を明らかにした。また、生徒の活動のみではなく新しい教育システム開発として、世界から学識者を招き、さらに一般参加者を募って多くの方々と大人熟議を開催した。大人熟議には、教育者のみではなく、政治家、官庁職員、企業家、エンジニア等の方々が集まり多くの意見交換をすることができた。

5）現時点までの参加生徒の成長と教育的効果

参加生徒は、東京、奈良のエンパワーメントパートナーも含め100人とされているが、全5回の集中スクール開催期間に受験（高校・大学）期をむかえる生徒もいるので、全集中スクールに参加している生徒は、70人位のメンバーとなる。第1回と第3回集中スクール開催時を比較して、「東北スクールに参加して、自分がどのように変わり成長したか」という内容のアンケートを実施した。

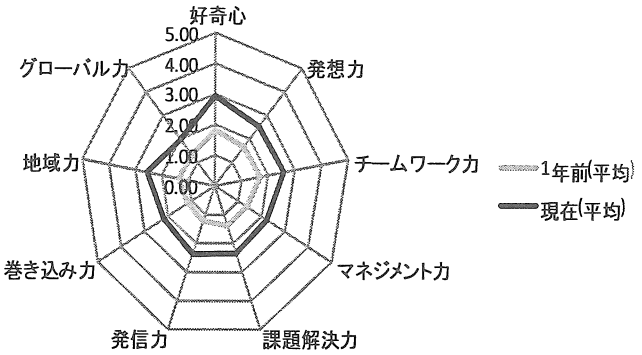
人材要件	1年前(平均)	現在(平均)
好奇心	1.83	2.94
発想力	1.67	2.53
チームワーク力	1.71	2.59
マネジメント力	1.38	2.23
課題解決力	1.41	2.35
発信力	1.23	2.38
巻き込み力	1.15	2.17
地域力	1.36	2.55
グローバル力	1.32	1.97

この集中スクールでは、リーダーに必要な資質ということで授業（課題）を組んできている。その課題に対し、参加生徒が何処まで把握し自分なりに成長（変化）を感じているか福島大学が作成したアンケートで答えてもらった。アンケートの内容は以下のとおりである。

1.イノベータ人材に向けた到達度・成長度：イノベータ人材　到達度(5段階評価)
・スクール全体・参加カテゴリ別　成長分布

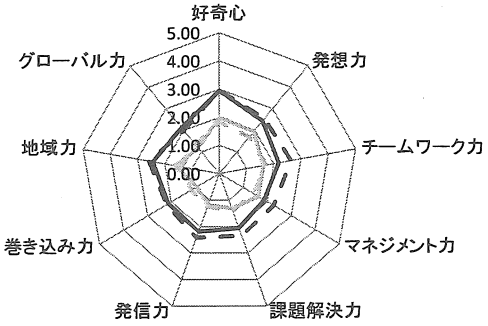
2.指標カテゴリ別　成長要因分析
・新しいものを積極的に学び、自由に発想する力　・自律かつ協調して事業を推進する力
・好奇心発想力・課題を解決し創造する力・周りを巻き込む力、発信力
・地域への深い理解と世界への展開
【1】イノベータ人材 到達度(5段階評価)　スクール全体

参加生徒全体の到達度

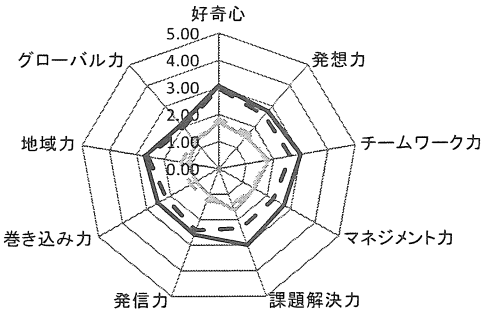


【2】テーマ別の各人材要件の１年前と現在のレベルの平均値を算出

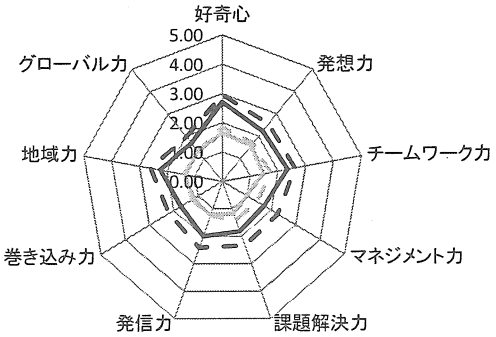
① コミュニケーション／ＰＲ班に参加した生徒



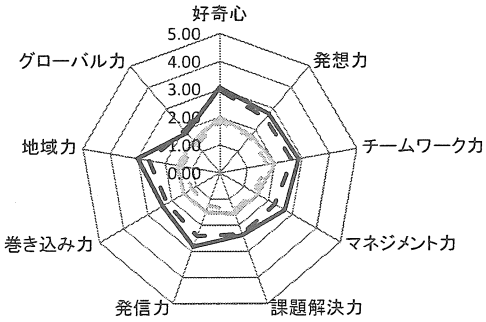
② イベント（シナリオ）班に参加した生徒



③ セルフドキュメントに参加した生徒



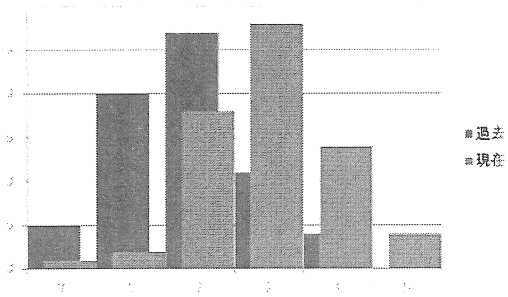
④ 産官学連携に参加した生徒



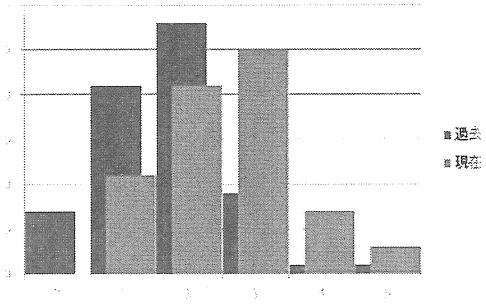
____：過去　__：現在（テーマ別）　_____：現在（全体）

新しいものを積極的に学び、自由に発想する力

①好奇心

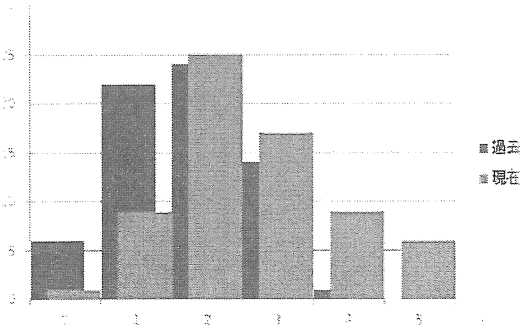


②発想力

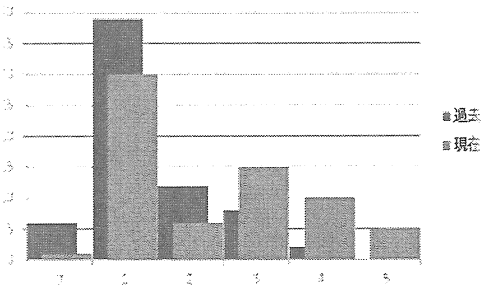


自律かつ協調して事業を推進する力

③チームワーク力

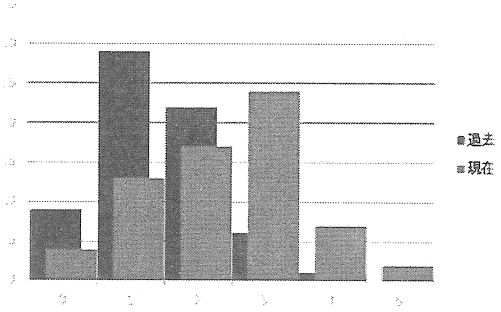


④マネージメント力



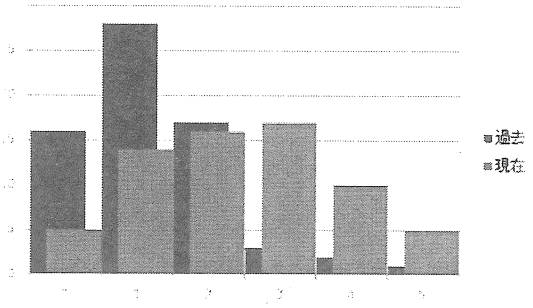
課題を解決し創造する力

⑤課題解決力

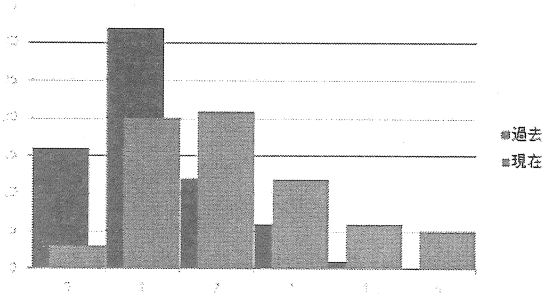


周りを巻き込む力、発信力

⑥発信力

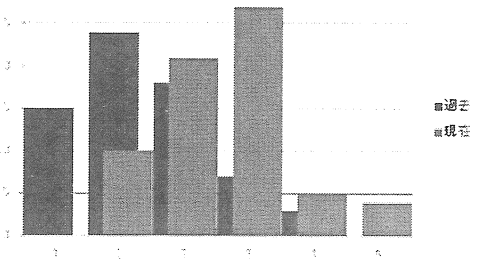


⑦巻き込み力

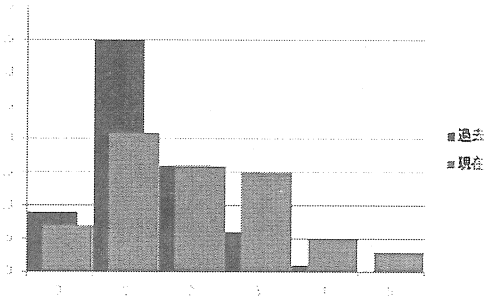


地域への深い理解と世界への展開

⑧地域力



⑨グローバル力



（イノベータ人材に向けた到達度・成長度および成長要因分析から：2014.3 福島大学）

上記のグラフから東北 3 県の生徒は、知識的学習に対しては力があるものの、発想力、好奇心、発信力といった自らが外部へ向けて働きかけたり、アイディアを提案したりする能力に自信が持てずにいたことがわかる。また、普段先生からの指示に従い活動する能力については非常に高い生徒たちであることは、生徒会での活動や普段の授業態度から参加校の先生方誰もが認めていることだったが、自分たちで課題を発見し、解決していく能力に乏しかったということを今回のこのアンケートから理解することができたと思われる。さらに、普段の生活の中で地域の人たちと、自らが話しかけていくことなどごく少数だった日常から、積極的に地域の方々と話し合い、提案、発信できる生徒へと成長してきていることがわかってきている。また、この調査結果で各地域の先生方もこのような教育活動

こそが、生徒自身に大きな自信、信頼感、安心感、安定感を獲得させ、自らの力を駆使して前向きに外部へ発信する力を培うことができるようになることを認識している。

現時点での教師主導型の授業中心（黒板に生徒全員が向かって受ける授業）では、知識は身につくもののその身に付けた「知識」をどう使うかという「知恵」を身につけることができないと考える。現学習院大学、東京大学名誉教授でＯＥＣＤ東北スクールのＥＰでもある佐藤学氏は、その著書「学校の挑戦～学びの共同体～」の中で、「教師が生徒へ出す課題は高く、一人の力では解決しきれない方が良い」と言っている。さらに「その課題で生徒がジャンプする学び・教師と仲間と共に学ぶ学びこそ大切である」と言っている。
東北スクールでの学びはこれからの東北復興のために、社会（世界）レベルで考えさせることが必要である。教師も、専門家も、学識者も答えが一つではなく、どの答えにもメリット、デメリットがあるという課題を、生徒が共に話し、教え、伝え合い、最善を考えることこそ重要である。
自由記述でスクールに参加しての生徒の感想は以下の通りである。

～参加生徒（福島・宮城・岩手）からの感想～

・大きな会議ではまだですが、地域の会議では自分の発言を出来るようになった。
・復興ということを誰もが言うけれど、それぞれの復興の違いがあることが分かった。だからこそ自分の復興をしっかり伝えるようになりたい。
・復旧と復興の違いや自分が目指すのはということを考えられるようになった。
・グループでの話し合いで自分が司会を務めていた。今までなかった自分にびっくり！
・他県、他校の人の意見をじっくり聴き、共感したり、自分との違いを伝えられるようになった。
・まだ自分は変わっていない気がする。でも少しだけ人前で話せた。
・自分の考えなどたいしたことではないと思っていたが、真剣にそれに答えてくれる仲間がいて自信を持って発言ができるようになった。
・奈良や東京の人たちと関わることで、東北だけでなく様々な文化があり、コミュニケーション能力の高さに驚いた。
・原発による風評被害に悩まされてきたが、自分たちの伝え方で東北にまた人が集まるようにしたい。
・「復興を促進させるには」いうことを強く考えるようになった。
・地域のことを良く知り、地元なのに知らなかったことが多くあったことを知り、震災前より地域への思いが強くなった。
・ただ現状の不満や不安を言うのではなく、なぜ不満なのか考え、よりよくするため自分から考えるようになった。
・リーダー（知事、市長）はどのように行動しなければならないか、他国の大統領をはじめとするリーダーはどのように感じ、決断しているのか、リーダーについて考えるようになった。
・自分の考えが行き詰ったりすると近くにいる先生からヘルプをいただいたり、他の地域の友達から違う考えのアドバイスが出たりするので安心して考えられるようになった。
・地元には近いうちに帰ることはできないし、完全復興が不可能だということはわかっている。そこで自分たちができることは、笑顔で前向き生きていくことだと思っている。

・世界の人と繋がるために英語もフランス語も頑張る。せっかくもらったチャンスなのだから。
・東北スクールで大人と同等に考えることができるようになった。
・自分の世界はまだまだ一部だと理解できた。広めていきたい。
・高校生に中学生の自分から話しかけている安心感。他の地域人と繋ぎ合うことを積極的に！
・大人の意見を聴けるようになった。
・もともと地元が好きではなかったけれど、地元の人や地域に触れ合う機会が多くなり、好きに少し近づくことができたし、町のために何かを・・・と考えられるようになった。

頁の関係でもっと多くの感想が残っているが、筆者の心に残った感想をここに記した。
次にエンパワーメント校である東京や奈良の生徒達は、このスクールに参加してどのように感じているかを同じ自由記述の感想から挙げてみた。

～エンパワーメント校の生徒（東京・奈良）からの感想～

・最初は被災した皆さんに遠慮の気持ちが多く、なかなか踏み込んだことを聴けなかったが回を重ねるごとに少しずつ聴けるようになった。
・私の地域と東北はとても遠いところにあるけれど、東北は日本の大切な一部分で、地域を復興させることは日本全体が協力しなければならない。
・今までの自分は、自分から発信することばかりだったように感じる。ＥＰになって「聴く」という姿勢を学んだ。
・画面の向こうで起きていることがリアルに感じていなかった。スクールに来てその現実を目のあたりにし、ショックを受けるとともに東北の同年代の人たちも自分と同じ「夢見る人」だと理解し、その夢をスクール外の活動でも共に目指そうと思った。
・大人から無理だと言われてもあきらめず、工夫を凝らす努力がとても大切に感じた。

最後に引率している教員や参加している大人からの感想をまとめてみた。

～参加している大人（教員・専門家）からの感想～

・子どもにたちに主導権を渡す準備をする。子どもたちと早い時期から伴走できる大人を増やす。
・グローバル人材、産業人材育成施策を中等教育期から取り入れる。
・教育によっての復興　生徒の前向きな行動によって保護者や地域が活力を取り戻し、復興へとつなげる。
・知識習得型の学習だけではなく、それらを危機や課題に合わせて変化させたり、間を埋める能力を養わせるなど世界が求める教育システムを東北から創造し発信する。
・生徒が自ら考え、課題を発見し解決していける力を身につけること。
・東北は多くの魅力を持った地域であり、独自の地域色を出し世界とつながる可能性を持つ。しかし中央と比べ人的、制度的体制がとても弱く対応が難しい。
・現在、未来創造型教育を日本の教育に取り入れることが課題。総合的学習の時間の導入を契機に新しい教育・学習方法の導入・開発に努めている。
・課題解決型の学習は、従来のプロジェクト学習と違いその課題は身近にあるものが多い。

それに向けての学習は意欲が上がると思う。子どもが復興に参画すること。大人に都合よく利用されないこと。

6）今後の課題

第１回の集中スクールから参加していて筆者が感じることは、生徒は実に良く努力し新しい自分や社会づくりを目指している。そして回を重ねるごとに、創造力と発信力が大きく成長していることに驚かされる。また、地域を越えた仲間意識、協調性、思いやりも育ってきている。引率教員は、そんな姿に毎回の集中スクールの終わりには目頭を熱くしていたと思う。

問題は、各地域に戻ってからだと筆者は考える。それは東北スクールの回が進み学習内容が進めば進むほど、地域の学校での学習内容の格差がついてきてしまうからだ。東北スクールの学習では、指導者やＥＰから課題を出される。その後は自分たちで考えわからないことを相談し合い、教え合う姿勢が確立してきている。しかし地域に戻るとそういった生徒は、授業中におしゃべりをする不適応型生徒と評価されることもあるようだ。今後、東北スクールから全国の学校を変える方向を示唆するのであれば、管理職である校長、教育主事等を活動に引き入れ、教師全体の教育哲学を変革させていく必要があると考える。

2014年８月にフランス・パリでの「復幸祭」は必ずや東北の生徒とエンパワーメントの生徒たちに最良の成果をもたらすことになると思う。パリでの復幸祭が一区切りとなっているが、ここで終わらないようにすべきと筆者は考える。復興が続いている限り、東北でリーダーになるべく生徒の育成と皆の力で東北復興を目指そうとする姿勢は終わらせるべきではない。そこで次の課題だが、東京オリンピック開催で、東北をアピールできるように更にイベントをレベルアップさせ、世界の人々に豊かな東北を印象付けることだと考えた。その時の指導者に現時点で参加している生徒がなってくれていたらこの企画はもっと大きな成果を生むことであろう。

東北から始まる日本の輝ける明日に向けて。

参考引用文献

・ＯＥＣＤ東北スクールホームページ：http://oecdtouhokuschoolsub.jp
・イノベータ人材に向けた到達度・成長度および成長要因分析から：2014.3 福島大学
・学校の挑戦～学びの共同体を創る～　佐藤学著　2006年小学館